

鳴海宿コース 史跡・文化財・その他散策ご案内

東海道 鳴海宿（とうかいどう なるみしゅく） 名古屋市緑区内
徳川家康は信長、秀吉の交通政策を継承し関ヶ原の合戦の翌年慶長6年（1601）に初めて東海道の各駅に伝馬の制を布し〈伝馬御朱印〉、53駅を設定した。鳴海宿は東西の常夜灯と木戸の間の1.8kmの街村式の町並みであった。《江戸より40番目の宿場、87里（350km）京より38里（152km）、東は池鯉鮒、西は熱田、本陣1、脇本陣2、問屋場2、旅籠68、総家数847軒、人口3643人、天保14年》

① **浅間神社**（せんげんじんじゃ）（鳴海町向田）
祭神は木花開那姫命。現在は秋葉社も合祀、元文2年（1737）鳴海八幡宮のお旅所となり、通称浅間堂という。毎年7月30日に輪くぐり（無病無災）の神事がある。

② **復元高札場**（ふくげんこうさつば）札の辻跡（鳴海町本町）
江戸時代の正徳元年（1711）、宿場の中央に幕府や藩の重要法令を周知するため、大きな屋根付きの高札場が建てられ、高札が掲示された。平成21年11月に鳴海商工会・区役所・緑区ルネッサンスフォーラムが中心になって高札場が復元された。

③ **天神社**（あまつかみしゃ）根古屋城跡・城跡公園（鳴海町根古屋）
庚申坂を上ると一帯は元の鳴海城の跡で大木が鬱蒼と茂り、高い石段を登る丘であったが、切り通しの広い道路ができ、東に天神社、西に城跡公園と別れたようになっている。室町時代応永3年（1394）安原備中守宗範がここにあった成海神社を乙子山に移し鳴海城を築城した。後に織田信秀の家臣山口左馬助父子が城主だったが、今川方に寝返り、桶狭間の合戦のときには今川方の岡部五郎兵衛元信が城主だった。岡部元信は合戦後に主君今川義元の首と交換で城を織田方に明け渡した。天正18年（1590）廃城となり、成海神社のお旅所として天神社が祀られた。

④ **雷貝塚**（いかずちかいづか）（鳴海町雷）
昭和2年（1927）鳴海小学校の北辺りで発見された縄文晩期から弥生期に至る複合遺跡で、この地方では最初に屈葬人骨、獣骨、魚骨、貝類、石器、土器、須恵器、中世陶器などが出土した。考古学研究上重要な発見があり、土器は雷式と形式名が与えられ、鳴海の貝塚遺跡の先駆となった。

⑤ **鳴海球場跡**（なるみきゅうじょうあと）（鳴海町文木）（現在：名鉄自動車学校）
昭和2年10月最初の試合が開かれて以後、中等野球（現高校野球）のメッカとして名選手を生み出した。鳴海球場は甲子園球場・神宮球場と共に日本三大球場の一つとして少年のあこがれの球場だった。昭和6年11月にはゲーリック選手、昭和9年には全米選抜チームのベーブ・ルースが来日し、鳴海球場で試合が行われた。昭和11年には日本で初めてプロ野球の試合が行われプロ野球発祥の球場として有名である。

⑥ **善照寺砦跡**（ぜんしょうじとりであと）砦公園（鳴海町砦）
桶狭間の合戦の織田方の陣地。永禄2年（1559）織田信長が築いた三砦の一つで東西43m、南北29mと伝えられている。信長は合戦に先立ち兵を集め、本隊が駐留していると見せかけ幟・旗を残して密かに桶狭間へ奇襲をかけたと言われている。公園内には鳴海絞開祖の三浦玄忠（豊後高田藩侍医）夫人の碑がある。

⑦ **東の問屋場跡**（ひがしのとんやばあと）元鳴海町役場跡（鳴海町本町）
問屋場は慶長6年（1601）江戸時代宿駅制度と同時に運送、文書の送達、宿の割当てなどのために設けられた施設で、いつでも人足・馬を用意して人と荷物を運んだ。鳴海宿には初めに花井1ヶ所にあったが、天保年間に東の問屋場が開設された後、月番交替で勤めた。

⑧ **曲尺之手**（かねのて）（鉤の手）（鳴海町本町と相原町との境）
道がクランクに曲がっている曲尺之手は全国各地にあり城下町で敵からの攻撃を防御するために、わざわざ道を曲げることが行われていた。

⑨ **中島橋**（なかしまはし）（鳴海町下中）
扇川に架かる橋で江戸時代には勾欄（欄干）付の反り橋で尾張藩の直轄で天白橋と並んで大きな橋だった。明治になって平橋にされ、昭和52年3月に今の永久橋に改築された。

⑩ **中島砦跡**（なかしまとりであと）（鳴海町下中）
丹下砦・善照寺砦と共に鳴海城を包囲するために織田信長が築いた砦で梶川平左衛門以下260名の武士を配置した。規模は長さ144m、幅90mといわれる。

信長はこの砦を経由して桶狭間に向かった。砦が廃された後に梶川の五輪塔が残されていたが今はなく、昭和2年（1927）に中島砦址の碑が建てられた。

⑪ **東の常夜灯**（ひがしのじょうやとう）（秋葉燈籠）（鳴海町平部）
文化3年（1806）宿場町の東の入り口に建てられた。旅人の目印で宿や道中の安全を祈願したものであり、木戸と立場（茶屋）があった。石灯籠の四面には「永代常夜灯」「宿中為安全」「秋葉大権現」「文化三年 丙寅正月」の文字が刻まれている。

⑫ **本陣跡**（ほんじんあと）（鳴海町根古屋）
鳴海本陣は寛永10年（1633）ごろ設置され西尾家が代々勤め、幕末には下郷家が継いだ。敷地678坪、建坪は273坪で広大な建物であった。

⑬ **扇川土場跡と郷蔵**（おおぎがわどばあととごうぐら）（鳴海町最中）
鳴海橋の下流の右岸に戦後しばらく土場という船着場からの荷揚げ場があった。江戸時代には湊があり、ここから保田（現名古屋港）まで小舟で荷（酒、絞）を運び千石船に積替えて江戸まで運んだ。岸部には尾張藩の年貢米を収める郷蔵があった。鳴海の年貢米もここから熱田堀川をのぼり三蔵へ収めた。

⑭ **花井の井戸跡**（はないのいどあと）（鳴海町花井）
鳴海城主安原備中守宗範の家臣伊勢木右衛門の屋敷にあった井戸で桔梗の花が咲いていたので花井と言われる。名泉で江戸時代は酒造りに、最近まで飲み水として使われていた。

⑮ **成海神社**（なるみじんじゃ）（鳴海町乙子山）
朱鳥元年（686）の創建。熱田神宮の東宮として鎮座し、鳴海の氏神「東宮さん」と尊崇。応永3年（1394）根古屋城の築城の為、乙子山に移転。毎年10月第2日曜日に秋の大祭で神輿・山車4台の奉納のほか日本武尊の故事によるお舟流しの神事が行われる。本殿は延宝5年（1677）建立の三間社流れ造りであったが創紀1300年に鑑み昭和61年（1986）新拝殿・参集殿・翼廊の新築と本殿・直来殿を修築し式年大祭を斎行した。境内は13000坪あり、氷上社・源太夫社・八幡社・北野社などの末社と東宮稲荷がある。

⑯ **鳴海陣屋跡**（なるみじんやあと）代官所跡（鳴海町森下）
江戸中期天明2年（1782）尾張藩の地方役所として鳴海陣屋が設けられ、初代代官飯沼定右衛門・手代4人・足軽3人が定詰し、年貢徴収・寺社関係の行政や土木・追捕、訴訟業務に従事した。鳴海代官は鳴海村から愛知郡の東南部や知多郡の東半分を収め、121ヶ村を支配し、石高7万2千石を統括した大代官であった。

⑰ **丹下砦跡**（たんげとりであと）（鳴海町丹下、清水寺）
織田信長が永禄2年（1559）光明寺から裏手の清水寺遺跡あたりに設けたと言われるが、はっきりした跡はない。今川方の鳴海城を抑えるために築いた善照寺・中島等の一連の砦での一つである。東西84米・南北78米で、信長公記によると水野帯刀・山口海老之丞・柘植玄蕃充らが勤めた。

⑱ **鉾の木貝塚・遺跡**（ほこのきかいづか・いせき）（鳴海町鉾の木）
東海道に面する丘陵にあり、昭和5年野村三郎氏が発見した。貝塚は上下二層になっており、発掘された土器は縄文前期に属する。上層は爪形紋や羽状を主とし（鉾の木式）、下層はやや厚手と薄手の土器が出土している。近くの松の木に日本武尊が鉾をかけて休憩したと言われることから‘鉾の木’の名がついた。

⑲ **大塚古墳と赤塚古墳**（おおつかこふんとあかつかこふん）（鳴海町赤塚）
大塚古墳は新海池の西岸斜面に築造された円墳で直径20米。横穴式石室（玄室）は二穴連続式で、現在天井石は取去られて側壁のみ残っている。南方50mに赤塚古墳があり石室の基底石のみが残っている。

⑳ **新海池**（にいのみいけ）（鳴海町池上）
江戸時代の寛永11年（1634）頃造成された12のため池の1つで、周囲約1700mと緑区で最も大きい。新海五平治が藩の許可を得て造成したので、その名がついた。明治までその功績を讃えて受益農民が毎年稲一束を子孫の家に収めていた。